キルギス人の経済観形成に係わる一考察
――キルギス民族の歴史と行動理論から――

大倉　忠人

本報告は、今日のキルギス人の多くが「一定の経済的な価値観」（以下、「経済観」と略す）に基づいて行動していると仮定し、現在起こっている様々な社会現象の背景にあるキルギス人の行動から報告者が独自に 5 つの経済観を導出し、その有効性の検証を試みたものである。5 つの経済観とは、①遊牧民族としての資産形成意識、②バザール経済で培われた商感覚、③遊牧民族としての共同体維持やイスラムの教えによる所得分配思想、④社会主義・計画経済時代に定着したシステム依存、⑤ソヴィエト連邦時代に培われたグローバル意識である。本報告では、先行研究を踏まえながら、これら 5 つの経済観がどのような歴史を経てキルギス人の意識下に形成され定着したのか、さらにキルギス人一人ひとりの行動が社会現象としてどのように集約され表出しているのか、その波及経路の解明を試みた。キルギス人の経済観を、その形成過程をも含めて体系的に整理し、形式知化することは、今後キルギスにおいて社会制度を設計したり、各種政策を立案・施行したりするうえで一定の意義があると考えたからである。

先行研究としては、［間野 1977］などの中央アジアの歴史を対象とした研究において、「遊牧民族」「イスラム化」「帝政ロシアによる支配と定住化」「社会主義国家への編入」というキルギス民族の歩んだ歴史から幅広く言及されている。また、1991 年のソヴィエト連邦からの独立後に市場経済化政策の立案と施行に寄与した金田は、［金田 1995］において、キルギス人の持つ「心理的遺制」として、ソヴィエト連邦時代に形成された国民の「国家依存」「受動性」、「平等志向」、遊牧民時代の前近代的性格として持ちうる「血縁地縁主義」の 4 つを挙げている。しかし、［金田 1995］が「ここであげた多くの特徴は、20 代までの若い世代には当てはまらない」と述べているように、1995 年時点で 20 代未満であった現在のキルギス人に対して当てはまるのかどうか検証が必要であろう。［北村 1999］では、中央アジアの人々は、東西の交易の中心地にバザール経済を築いたという点において、商才に長けていると民族の歴史や気質などに基づいた分析を行なっている。さらに、独立後の市場経済化の過程において、ナリン州の村落で長期間フィールド調査を行なった文化人類学者の吉田は、

［吉田 2004］において、ソヴィエト連邦の崩壊によってキルギス民族が直面した急激な生活や文化の変化、また伝統的な親族ネットワークが果たした役割をキルギス北部の村における長期間の参与観察によって明らかにした。また、［嶺井・川野 2012］は、ロシアやカザフスタンに出稼ぎに出るための条件として、ソヴィエト時代から続くロシア語の重要性を教育の観点から論じている。

本報告では、こうした先行研究を受けて、以下の通り論証した。まず、1991 年のソヴィエト連邦からの独立以降、キルギスでは 2005 年と 2010 年に革命が起き、政権が二度も転覆したという大きな社会現象の背景には、キルギス社会における民主化の急速な浸透に加えて、市場経済化に伴う貧富の格差の拡大があると仮定した。また、二度の革命に加えて、2000 年以降、国内産業の未発達とインフラの老朽化、若年層の出稼ぎと農村の疲弊、生活圏の分化、貧困者の社会的包容の 5 つの社会現象として顕在化してきている。こうした社会現象は、社会主義から民主主義へ、計画経済から自由経済への移行などキルギス社会における大きな環境変化に対して、キルギス人が一定の経済観に基づいて行動した結果であると言えよう。よって、こうした変化によって導き出されたキルギス人の外発的動機並びに内発的動機を有史以来の歴史と彼らを取り巻く自然や社会環境に基づいて紐解くことにより、キルギス人の経済観として 5 つに導出した。さらに、この 5 つの経済観が実際に行動に結びつき、社会現象として顕在化するに至ったであろう過程を、［Maslow 1943］の「欲求 5 段階説」、［McGregor 1960］の「X 理論・Y 理論」、［Adams 1965］の「公平理論」という三つの行動理論を用いて検証した。なお、今日のキルギス人がこの 5 つの経済観をどの程度持ち得ているのかについて量的な調査を行なう必要性があることを今後取り組むべき課題として明示した。

報告後の質疑応答では、「バザール経済をどのように定義しているのか」「これらの経済観は今後の政策にどのように活かせるのか」「市場経済化という経済観をキルギス人は獲得したのではないか」「相互扶助という慣習が若者の自己実現を阻害しているのではないか」という質問に加えて、「本研究が何を説明するものなのかを明確にする必要がある」「世界経済という大きな枠組みの中でキルギス人の経済観を捉える必要がある」「5 つの経済観をそれぞれの多様性、関係性のなかで位置づける必要性がある」「政治家と表裏一体となり、キルギス経済を実質的に主導している富裕・エリート層の経済観についても加味する必要がある」という意見があり、今後の研究に対して有意義な視点を得ることができた。

＜参考文献＞

金田辰夫 1995『体制と人間―中央アジアの小国の再生―』東京：日本国際問題研究所。
北村歳治 1999『中央アジア経済―市場移行国の背景と課題―』東京：東洋経済新報社。
間野英二 1977『中央アジアの歴史』東京：講談社。

嶺井明子、川野辺敏編著 2012『中央アジアの教育とグローバリズム』東京：東信堂。
吉田世津子 2004『中央アジア農村の親族ネットワーク』東京：風響社。
Adams, J.S. 1965. “Inequity in social exchange,” *Advances in Experimental Social Psychology* 2, pp. 267–299.
Maslow, A.H. 1943. “A Theory of Human Motivation,” *Psychological Review* 50, pp. 370–396.
McGregor, D. 1960. *The Human Side of Enterprise*, New York: McGraw Hill.

（法政大学大学院博士後期課程）